

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

「四国四県、友情の水」

香川県 香川大学教育学部附属高松中学校 三年 溝口 真央

夕方放送される地方のニュース番組でも、今年は連日コロナ関連の報道が中心だ。しかし、私の住む香川県では例年この時期には、天気予報とセットで「早明浦ダムの貯水率」のニュースが毎日伝えられていた。これ以上貯水率が下がれば、取水制限をしなければならぬと報道されるほど、ダムの水が枯渇した年もあった。ホームセンターに行けば、渴水対策として、蛇口につける節水グッズや雨水の利用商品が陳列されており、市役所の入口には「節水にご協力ください」という横断幕まであった。香川県の水不足は、ここ数年で急におきはじめたものではなく、香川県民の水との戦いははるか昔から続いている。

日本で一番面積が小さい香川県は、ため池が一万二千以上あり日本でも三番目に多い。温暖な瀬戸内海気候は年間の降水量がとも少なく、地理的にも大きな河川がないため、慢性的な水不足にみまわれてきた。この深刻な水不足をどうにか解消しようと、昔の人は県内各地にため池を築き水の確保に力を注いできた。それでも、水不足に陥ったときは、頼みをするしかなかった。讃岐の国司を務めていた菅原道真公が、民の苦しむ姿をみて、自ら身を捧げて祈願したところ、待望の雨が三日三晩降り続いたというのは有名な話である。慈雨に喜ぶ民は、その歓喜と道真公への感謝を踊りで示した。その雨乞いの念仏踊りが今もなお、五穀豊穰を祈願するものとして、地元の滝宮天満宮で受け継がれている。

もちろん、雨乞いだけに頼ってきたわけではない。土木の技術を集結して、雨が多く降る他県から水をひいてくる香川用水を建設した。田植えの時期になると、ごうごうと音をたてて流れる水を怖いとさえ思うことがある。その水は、はるかかなた高知県の早明浦ダムから流れ出て、吉野川を下り、讃岐山脈を貫くトンネルを通り、はるばる香川まで運ばれてきている。そして、私たちの生活に欠かせない、水道用水・工業用水・農業用水として日々使われている。香川用水についていろいろと調

べると「讃岐の大動脈」と言われる理由に気づかされた。

祖父が行う米作りでは、五月から九月にかけて集中的に多くの水を使用している。五月の連休前には、田植えの準備のために代かきを行うが、その際は田んぼ一面になみなみと水が張られる。香川用水から分かれた水路に水を引き込み、田んぼとの境に祖父が手作りしたせき板を差し込むと、水は勢いよく田んぼの中へと流れていく。まだ小さかった頃、祖父について田んぼに行き、せき止められた水路に裸足で入り、膝下まで流れる冷たい水を弟とかけあつて遊んだことを鮮明に覚えている。祖父の田んぼに水がたまると、弟と二人で協力してその栓を外し、お隣さんの田んぼに水が流れていくようにしていた。上流の田んぼからだんだんと下流の田んぼへ、効率よく水をまわしていくことで、水を無駄にしない工夫がされていた。すぐに田んぼに水を引ける有難さ、偉人の技術のすばらしさ、そしてなにより水の大切さを実感した。

私たちがあたりまえに食べている米や野菜の成長には水が必要不可欠である。水がなければ食卓まで届くことはない。蛇口をひねれば水はいつでも・いくらでも出てくるので、私たちは水を使い放題のように錯覚しているが、水は枯渇する可能性がある。水も「限りある大切な資源」であることを意識して生活したい。なにより、香川用水に流れる水は、周りの県から分けていただいた「友情の水」である。一滴も無駄にすることなく大切に活用していかなくてはならないと感じた。食卓に差し込んでくる夕日を見て祖母が「明日も晴れやなあ」と言う。祖父は少し残念そうに「空梅雨やな」と言う。そんな日常を見て、今年はコロナの影響で手伝えなかつた田植えを来年は手伝おうかなと思った。